
双色

紫黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双色

【Nコード】

N3038U

【作者名】

紫黒

【あらすじ】

執着弟と強気兄の明るくない話。

登場人物

- 垣ノ内 直哉 - (17)
かきのうちなおや

高2。

165cm 52kgという小柄な体型。顔も童顔で色白な為、女の子に間違えられる事がある。

髪は黒、瞳の色は薄めの茶色。

気が強く、負けず嫌いで特に女の子に間違えられた時には手が出る。優しい面もあり涙脆い。その為、強引にされるとすぐに流されてしまう。

双子の弟である拓哉を大切に思いながらも、どこかで妬んでいる自分に自己嫌悪している。

- 垣ノ内 拓哉 - (17)
かきのうちたくや

高2。

183cmという長身とモデル並に整った容姿をしている。

女の子からモテるが本人は全く興味が無い様子。

髪は金で瞳は青のカラコンを入れている。左耳には三つピアスが付いているがその内の一つは誕生日に直哉から貰った物。

独占欲が強く嫉妬深い。

双子の兄である直哉に異常なまでに執着している。

- 新田 悠 - (17)
にいつた はるか

高2。

直哉の親友。

常に明るく元気で裏表が無い。しかし一度キレると手が付けられない

くなる。

直哉の事を大切にしており、このまま親友としてずっと仲良くしていければと願っている。

家庭の事情で現在一人暮らし。

料理が上手く、よく直哉を泊めてはその腕前を披露している。

- 秋山 龍 - (17)

高2。

拓哉と良く連んでいる。

喧嘩っ早くすぐに手を出すが基本優しい。自分に関係ない事には首を突っ込まない。

実は猫が大好きで一匹飼っている。

一人暮らしをしており、拓哉をちよくちよく泊めているが料理が壊滅的に下手でいつもコンビ二弁当かカップラーメン。

生活費は実家からの仕送り。

随時増える予定、

兄の思い

「父さん、母さん、行ってきます」

柔らかに微笑んでいる両親の写真に手を合わせる。

事故だった。

大雨で、カーブで、スピードが出ていて。

そんなまるでドラマや小説にありそうな死に方だった。

4

その時、俺達はまだ中二で親戚の家で世話になった。

優しくて温かくて、とても良い人達ばかりだった。

だけど、こんな育ち盛りの男を二人も養うのはきつと大変だっただろう。

高校に受かって中学を卒業した時に俺は告げた。

「一人暮らしをしたい」と。

初めは反対された。

まだまだ子供の自分達に一人暮らしなんて早いつて。

でも俺はこの気持ちを变える気は無かった。

結局は初めて反抗した俺に折れて一人暮らしを許してくれたが、条件を出された。

学費は向こうが持つという事と、何かあったらすぐに頼る事。

涙が止まらなかった。

こんな邪魔者の様な自分達を愛してくれて、勝手な事を抜かした自分をまだ案じてくれている。

高校を無事に卒業して就職する事が恩返しになるならと、俺は必ず立派な人間になる事を誓って短い間だったが世話になった家に別れを告げた。

弟の思い

親父とお袋が死んだ。

事故死だった。

あまりにも急な出来事で直はショックを隠しきれず、泣きじゃくった。

そんな兄貴の背中を擦りながら俺は思う。

ああ、やっと邪魔者が消えた。

親戚の家に引き取られた俺達は何の不自由も無く、中学生を送った。

しかし直はそれが嫌だったのだろう。

親戚とはいえ、今まで殆ど付き合いの無かった自分達からすれば他人と同じ存在に頼る事が。

無事にお互い同じ高校に受かり、もうすぐ中学ともお別れという時に直は親戚の連中に告げた。

「一人暮らししたい」と。

俺は歓喜に震えた。

一人暮らしという事は直と共に二人きりで生活出来る。

誰にも邪魔されない二人だけの空間。

想像しただけで幸せだった。

「大丈夫か？」

「お、おう、全然平気っ」

テレビを二人で運んでいるが直は華奢だ。

口では強がっているが腕が震えているのが分かる。

これじゃ陽が沈むまでに引越作業が終わらないと思い、俺はテレビを一人で持ち上げた。

「え、ちよっ」

「テレビは俺が運ぶから直はカーテン付けてくれ」

「…何か、ごめんな」

「気にすんな。直が怪我したら大変だからな」

「ッ、俺だつて男だ！」

「分かってる。でも心配なんだよ」

くしゃ、と綺麗な黒髪を撫でてやると、少し拗ねながらも頷いた。

双子なのに何もかもが違う俺達。

顔も性格も体型も好きな物も嫌いな物も。

ここまで違っていると本当に双子なのかも疑わしい位だ。

だけど俺は双子で良かったと思う。

だって血が繋がっている俺から直は離れられないから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3038u/>

双色

2011年10月9日09時19分発行